妻木晩田遺跡の焼失竪穴住居

鳥取県の大山町と淀江町にまたがる妻木山（むきやま）および晩田山の丘陵平坦面（標高90－179m）で、おもに弥生時代後期に比定される複数の高地性集落が発見された。これらの集落群を一括して妻木晩田遺跡と呼んでいる。平成9年度までの調査では、遺跡群全体で竪穴住居384棟、掘立柱建物502棟を検出しており、なかでも妻木山地区は竪穴住居155棟、掘立柱建物217棟を数え、居住関係施設が最も集中する。この妻木山D2E地区で、きわめて保存状況の良好な焼失竪穴住居跡SI－43がみつかった。本稿ではこれを43号住居と略称し、出土状況を概述するとともに、上部構造の復原案を示してみたい。

遺構平面　43号住居は隅丸方形の竪穴住居跡である（図1上の赤線）。平面規模は長軸方向（北西－東南）で4.98m、短軸方向（北東－南西）で4.62mを測り、正方形に近いかたちをしている。竪穴の床面直上からは、妻木晩田9期の土器片が出土しており、存続年代は弥生時代後期後葉（2世紀後半）頃と推定される。ちなみに妻木晩田遺跡の竪穴住居全体では、大まかながら、円形→隅丸方形・多角形→方形という形態変遷を確認できるという。数量的には隅丸方形プランが圧倒的に多く、それは43号住居が建っていた後期後葉にピークを迎える。

床面にたつ主柱は4本で、柱穴P4上には高さ8㎝、径10～12㎝の炭化した柱材が立っており、その地下部分は空洞化していた。また、主柱穴P1・P2・P3・P4の底径は22～30㎝であり、柱は径20㎝前後のものばかりであったろう。床面の深さは遺構検出面から約40㎝である。主柱穴の位置は隅に近く、壁から50㎝ほどしか離れていない。柱間寸法はP1－P2が228㎝、P2－P3が275㎝、P3－P4が252㎝、P4－P1が258㎝を測り、長軸（主軸）の北東側があきらかに縮んでいる。一般的に竪穴住居の入口は主軸のどちらか一方にあるが、南西側には壁溝が検出されているので、P1－P2側を入口とみたい。

中央ピットP5は竪穴の中心ではなく、わずかにP1－P2側に位置する。この配置もまたP1－P2側が入口にあたることの裏付けとなるかもしれない。山陰地方の竪穴住居に特有な中央ピットについては、従来機能不詳とされてきたが、妻木晩田遺跡では中央ピットから1条もしくは複数の溝が周壁にのび、さらに周堤を貫いて竪穴の外にまでのびる例が多数検出されている。この溝は床面に滲み出す水分の排出溝であるから、中央ピットは水溜の可能性が高い。43号住居ではP5を囲むようにして、赤褐色もしくは暗赤褐色の焼土面が3ヵ所に残る。水溜の周辺に地床炉を配していたということであろう。

炭化部材と焼土層　炭化材と屋根土層を一括して検出した埋土上層面の状況をのべておく（図1）。最も多量に炭化材を検出したのはP4－P1間である。とりわけP4側では、ほぼ平行に配列された板状の垂木材（幅15－30㎝）が心々距離約25㎝のピッチで並び、それらはP1とP4をつなぐ桁よりも内側にのびている。葺土層の下では、さ

図1　遺構平面図（上）とA-A'土層断面図（下）　1：80
＊平面図の赤線が床面の遺構を示す

図2　復原パース　＊床面のみ出土状況を示す

図3　復原断面図（左：桁行　右：梁行）　1：100

らに鮮明に平行配列の垂木を検出した（図4）。ただし、P4に近接する垂木材はわずかながら内向きに斜行している。一方、P3−P4間では中央東寄りの場所で、2本の垂木材が竪穴の中心方向に斜行して倒れており、葺土層の下では扇状の垂木配列を確認した。P1・P2・P3周辺のコーナー部分でも、やはり扇状の垂木配列がみとめられる。P3の北側に接する材は桁の可能性がある。なお、樹種については、現在鑑定中である。

P4−P1間では、垂木材を被覆する薄い茅の層を検出している。中央の長い2本の垂木の上面で、茅が水平方向に横たわる状況が鮮明にみとめられ、さらにそのP1側では水平方向の茅の上に、求心方向の茅を確認できる。直交して重層するこの茅列は、大量の焼土を含む分厚い土層の下にくいこんでいる。この土層全体が屋根の葺土と推定されるが、焼土がアメーバー形状の固まりをなして数ヵ所に分散するのは、屋根が焼け落ちる際、崩落土層の反転現象が発生したためと思われる。

上部構造の復原　以上から上部構造を検討してみよう。

1）軸組：　柱を壁近くに配する4本主柱構造である。柱径は約20cmと細いので、桁をうける上端は股木とした可能性が高い。常識的には柱に桁をのせてから、桁上に梁をわたしたはずだが、桁と梁の上面をそろえないと、平側と妻側で垂木勾配が変わるので、桁・梁の接合部で梁の下面に抉りをいれ、さらに梁の上面を平らに加工するなどの工夫を施していたであろう。復原案（図2・3）では、桁を梁の上下に通して、土屋根の勾配を確保した。

2）垂木配列と小屋組：　土屋根の下地として、板状の垂木を密に配する。平側では平行の垂木配列、妻側および四隅では扇状の垂木配列をとる。垂木は桁をこえて内側にのびるが、天窓が当然存在したはずだから、棟木まで達していたかどうかは不明である。復原案では、桁の4等分点の外側2ヵ所に梁を架け、そこに叉首を組んで棟木を支持し、叉首の中間に母屋桁を井桁状にめぐらして垂木掛けとした。この母屋桁には、周堤からのびる土屋根の垂木と、屋頂部の小さな草屋根の垂木の両方をかける。この草屋根の両妻が煙抜き兼天窓となる。

3）土屋根の構造：　密に並ぶ板状垂木の上にまず茅束を水平方向に敷き詰め、それと直交する縦方向に茅を葺き流してから、葺土を被せている。縦方向の茅は、土屋根から沁みてくる水分を周堤方向に流す機能、その下に敷く横方向の茅束は、土粒の落下防止の機能を期待されていたのであろう。茅を縦横に重ねる土屋根の下地は、群馬県中筋遺跡の焼失住居（5世紀）がよく知られているが、それに先行する弥生時代後期の例として注目される。

4）周堤と垂木勾配：　洞ノ原地区の大規模円形住居SI−08では、幅3〜5m、高さ30〜50cmのなだらかな周堤を検出している（図5）。43号住居は小規模なので、周堤幅はせいぜい2m程度と推定される。土屋根の勾配は一般に35度前後であり、この場合、垂木尻は周堤のほぼ中点に達する。この結果、竪穴周壁の外側には幅約1mの「棚」ができる。入口の構造は不明だが、樺太（サハリン）先住民の住居を参照した。

（浅川滋男／平城宮跡発掘調査部）

図4　妻木山43号住居平側の垂木配列（南から）

図5　洞ノ原地区SI−08住居の周堤（北から）